

## 二十四、島根の旅

三月八日午前六時二十六分己斐駅を発つ。春まだ寒く、小郡より北に入れば、入るにつれ雪を増し、山野はまったく銀世界、雪しきりに降る。午後零時津田駅につく。雨中を、バスにて浄円寺に着く。脇本君前講。三日間、浄土和讃を語る。鎌手の地、寺参り多く、念仏信者はあれども、すぐれたる念仏の行者少し。その原因多々あるべし。幾年たつても同一レベルを出です。願くば本部の聖会に帰り来れ。

十一日より大麻村染香寺に移る。集まる人少なく、聖会またさびし。哀れ河野直臣氏の長き精進苦闘もいまだ人に知られず、成すことも成すこともその足もとより崩されてゆく。誠心誠意のみにては足らずというか。君よ。何ものをも恐るることなかれ。悲しむことなかれ。ただ念仏一道に執持して、黙々の精進を続けたまえかし。雑多に手を出すなかれ。口を謹み、忍苦してまず、より深き大法の領解者、行者となりたまえ。しかし君の周囲すでに春の訪れを拝むではないか。一貫の相続こそいよいよ肝要なれ。

最初の日、午前別れたばかりの浄円寺の奥様、次男坊をつれ、子守をつれて来寺せられる。胸中の不審やる方なく聞法のためである。哀れ本年一月六歳にして地上を去りし嬢さんは、その母を動かして、求道出發せしめたるか。だれか小さき花の散りゆくを無意味とは言うぞ。子は母を動かして、発菩提心せしめた。よくも来られた来られた。寺におるがゆえに平凡に聞き、普通一般、尋常の心構えにては、百年を経ともいづいに、今一步というところにて、大法はわがものならず、その一步、実は千歩万歩ついに永遠輪廻の大因ではないか。私は、まことに喜んで、懇々としてお話する。「まことに長年、み親を殺し、盲にしておりました。」奥様の眼には露が光る。しかり奥様、百人の坊守中、真に如来おわします人幾人かある。みなほとんど、お仏飯に寄食する鼠にはあらざるか、大法樹に幹に葉に食い入る毛虫には非ざるか。仏法の興隆は、寺族の信仰向上以外にあり得ない。

これはひとり坊守だけのことではない。『仏藏経』淨戒品第五之一には、蝙蝠僧のことが説いてある。蝙蝠僧とは、「在家と名づけず、出家と名づけず、命終之後、直ちに地獄に入る。」者のことである。

「舍利弗、譬へば蝙蝠の、鳥を捕へんと欲する時は即ち穴に入って鼠と為り、鼠を捕へんと欲する時は、即ち空に飛んで鳥と為る。而も実に大鳥の用きあること無く、其の身臭穢にして但闇冥に樂しむ。舍利弗、破戒の比丘亦復是の如し」と。

僧か、しからず、俗か、しからず、僧を捕えて正法を求むれば、人間凡夫なりと穴にかくれ、人間凡夫を捕えんとすれば、三界の導師と邪見の大空に昇る。しかも世に処して、大鳥の用きなきもの、無信心の僧の現状ではないか。

仏ののたまわく、

「舍利弗、是の如きの人を、我法中に於て、是れを逆賊と為す。是れを法賊と為す。是れを欺誑詐偽の人と為す。但、活命を求めて衣食を貪重す」と。

「舍利弗、破戒の比丘、亦復是の如し。既に布薩（仏弟子集会して、罪を懺悔し、善法を長養すること）に入らず自ら恣にし、亦復王者の使役に入らず。白衣と名づけず、出家と名づけず、屍を焼きて残れる木の、復用ゆるにあたらざるが如し」と。又いわく、

「教誨に順はず、師命を拒逆し、自ら身を知らず、他人を知らず、………行事散乱して心専一ならず、まのあた面り瞋相あり、慳貪不信にして、恩義を識らず、多く貪欲を懐く………慚愧する所なく、自大放逸、憍慢我慢、好んで欺誑を行じ、其の身を讚美す………必墮地獄なり。」

ああ。誰か、蝙蝠僧にあらざる。如来の前に五体投地して、真に念仏行者となるべきである。蝙蝠僧はついに蝙蝠僧を知らず。何ゆえに聖人は、愚禿と名告らせたまいしぞ。謹んで慚愧すべし。

十四日、益田町仏教会館に移る。会館とは名のみの借屋なれども、同胞の念仏の家である。三日間を過ごす。願生偈の初めを語る。家という家にすべて問題がある。いずれの問題もついに念仏道に帰せなければ解決はしない。だれもかれも、魂のどん底には、満たされないものを持つて困っている。

十七日、益田町発の自動車で東仙道村に入る。自動車を下りて山道に入る。遅しとは言え春はすでに来ている。畑の中の枯葉につつまれた白菜の芯、露の臺、私の魂を底から動かして「雪まばらに残れども、すでに露の臺は出で、風寒むけれども、春の精力すでに大地の上に現る、極寒の冷水山野を包む時、雪の底此の力ありて忍ぶ、人生行路苦心慘憺の裏にも、無限絶対の願力ありてひそみ、聞法の春に値うて汝の上に顕れ、ついに大信の華と咲きたもう。」（四月号「聖光」巻頭言）と書かした。

正明寺につく。来て見れば坊守のご尊父三浦愛次郎氏は、鎌手より、初代様、経代様、久子様のお子様三人とお孫二人とをかり集めて来ていられる。これで親子全部であり、すべて団員である。近頃三浦氏は奥様広子法師を失われ、驚き一人のものあり、かく集められたのである。亡き奥様の念仏のみたま、ご一族中に生きたもうを見る。ここは去年の夏とこの度で二回である。集まる人のほとんどが幼稚ではあるが、昨年より待ち続けてくださった方二三あり、まことにうれしい。いずれの里にも必ず念仏の華は咲く。東頭雄氏をみなで念仏の八方ぜめにし、春の聖講へ出られることになり、和氣あいあいの裏に三日間をおえる。東仙道の地よ。邪道を出でよ。しこうして正信の法田と化せよ。ここに秋田太郎一氏、花田氏あり、東氏とともに念仏の大旗を進めよ。

母上よりのお手紙を頂く。

「がつしよう。なむあみだぶつ。今はがきいただきましたまして、二人ともぶじとのこと、うれしくよみました。本ぶにもみなぶじで、ねんぶつとともに、たのしく日ぐらしさせていただきます。わたしもまい日きぬえがよくなるので、げんきになりましたから、ごあんしんください。けい三もげんきです。三人の子どももぶぢです。

まい日ゆびおりかぞへて、みなさまがおかへりくださるのに、ちかづいてくるのだからともうして、いろいろのしたくをしてゐます。十二日はこちらではすこしばかりのかぜで、なにのさわりもないでした。からだにむりをせずにおだいぢに。わきもとさんによろしくもうしてください。

三月十六日 ははより」

母上の病快復何よりうれし。何事につけても本部を憶う。母上ただ念仏申させたまえかし。

二十日。天気晴朗、バス、海岸を走る、快し。三隅町に着き、若に迎えられて、夕クシーにて、黒沢村の入口につく。それより羊腸たる山坂である。足下に村落を眺め、彼方に中国山脈の主脈屏風のごとく立ち、白雪に覆われるを見る。山頂に登れば左に日本海を眺む。山また山、風景また佳し。山上にて郵便屋さんに会い、今度本部に入る小田夏枝さんの手紙を受け取る。汗をふきふき山上にて読む。

「合掌南無阿弥陀仏 先生ありがとうございます。小使さんを教室に呼んで二人で泣きながら拝読させて頂きました。ただ二人でお念仏申させていただきました。先生きつときつとよい子になったと申していただける夏枝にならせて頂きます。どんな苦しいことがございましたも、先生の児にいただいた夏枝は、うち勝つて精進させて頂けます。ああこの深い深いご恩、身を粉にしても、はつきり誓わせていただきます。どうぞ育ててやってくださいませ。

本日退職願を出しました。残る一週間の小学校生活、最後の努力を尽さして頂きます。先生のお言葉胸にきざみつけて今日まで参りました。最後の一日まで守り続けておとなしく出て参ります。

八方より聞こえる批評、馬鹿だと言つてくれる声、惜しんでくれる声、すべてをありがたく念仏の中にいただいてゆきます。ただ受持の子どもの心より出る声、どうしても涙してしまいます。

小使さんがいつも話してくれます。『鐘をならす度に、お念仏を申さしていただきますよ。住岡先生を思い出さしていただきます。』私もあの日より鐘の音を聞く度にお念仏の心にかえらしていただき、み仏のご恩、先生のご恩を思わせていただきます。

広瀬の奥様も、尊いご精進のご相続でございます。終日ありがたいお育てにあずかります。(下略)

いよいよ本部に来られるか。ただ一つ、最初の心を最後まで忘れないように。

黒沢村に着いた。淋しい村ではあるが、同胞が待つていてくれると思えばありがたい。片山さんに迎えられて、若の寺、光善寺に入れば、すでに岡本法幢、武井諦了のご兩人あり、急に花が咲いたほどにぎやかになる。境内にはまだ雪さえあるが人の心は温い。この地は、数年前一度来たことはあるが、この度が初めてと言つていい。しかし昨年鎌手の聖講、および十二月の本部の報恩聖講に帰つて来た人がたくさんあるので、最初とは思えないほどの雰囲気である。

いよいよ昼席がはじまる。本堂より流れくる念仏の声、音、香り、何という正明寺との大きな差であることよ、張りきつた、ここまで響く血脈の流れの音、本堂に出れば、講演会ではあるが聖講そっくりの構えと空気が、若や同胞たちの日ごろの精進を思う。無量寿経を講ずることにする。会座と一体になってまことに尊くありがたいきわみである。天下の同胞よ。わが心は、聖会澄み渡れば渡るほど、同胞を憶うよ。

ある人言わく光明団は同胞意識が強いと。確かに「われらは兄弟である」との自覚が強い。それは六字の行者として当然のことではないか。貪欲によるかぎり、肉親といえども、一つではない。念仏によるかぎり、他人といえども、肉親以上の肉親である。

ただ心すべきは、ただ数人が、固陋なる小我の城に立てこもり、気の合わざる者を排斥し、非難し、走り去らしめて、もつて自ら真の行者なりと気取ることである。他のわれにとけることを求めず、潮の形なくして一切の形に同ずるがごとく、万人にとって生きる心、すなわち如来廻向の大信心である。

本部より二通の手紙、この寺で受く。うれしきこと。

「合掌御心配をおかけ致しましてまことに相すみません。

……十二日夜、本部員一同二階の十畳でお抹茶を頂きました。部屋には香が焚かれ、外には雨がしとしと降っています。私の心を落つけてくれます。十一時までみなで静かに語りました。日常のすべての動作において、お茶のごとく、どの部分も無駄なく、いい加減なところなく、すべてが美しく満たされていなくてはならないことを感じました。完全を果の相の上に見て、満足を未来へ未来へとおしやり、現実の一步步を軽んずる時、永遠の真のよろこびも充足もなくておわるであろう。私はお茶をたてられる相をじつと拝見してかくのごとく感じました。

十四日「国の鎮め」の原稿を拝受いたし、先生の心臓の冴えを憶い、私の心臓の混濁を痛感慚愧致しました。いよいよ片時もお念仏を離れてはならぬと思いました。

十五日、川崎氏が久保田に所用があつて来たとしてちよつと工場まで立寄られました。先日とは別人のごとくお顔が晴れて朗かでした。煙草を下さいました。バット三個ではありましたが、私には生れてからこれほどありがたい頂き物をしたことはありません。ますます念仏一道ご精進のほど念ぜざるを得ません。

十八日、通信鈔の原稿を拝受して先生と団員との間にお六字の筋が通り、美しい情によつてつながれていることを感じ、親子というも、師弟というも、兄弟夫婦というも、これではなくてはならぬと、みなさまと語り合いました。毎日のように食膳に集まれば、今日はどこ、何日はどこがすむ、雨につけ風につけかの口から必ず先生のお噂が出ます…… 温三

「合掌 南無阿弥陀仏 貴郎様が石見路へお旅立になりました日から、ほとんどの日、貴郎様の夢を見ますのでお案じ申し上げて居りましたが、お足もなおり、おすこやかなご様子承り安心致しました。

昨夜も一昨夜もその前の夜も夢を見ました。みな、ご講演承る夢のみ、きつと一筋の糸を、お念仏申して暮せとの糸を旅にいます貴郎が、いつも引きずめに引いていて下さいますのだと、もったいなく存じます。御地はまだお寒くてずいぶんお厳しくいらつしやいますことと、家にいて楽にお留守をさしていただく私を相済まなく存じます。くれぐれご要心遊ばして下さいませ。……………本部員はみな元氣でお念仏とともに朗かに働いて居りますからご心配下さいますな。

春の講習はひとしお待たれてなりません。あなた様を通してのみ仏様のみむね、心の貧しい私は、伝えようとして下さるあなたのご説法の一をもなかなか完全には頂戴致しません。心や頭では分りましても、生活そのものをみ教えどおりに生きさせていただくことは、絹の命がけの願でございますが、なかなかできません。先日のお手紙で頂きました「戦々兢兢として己をおそれよ。」の御言葉頂きましてからはますます落ちこんでゆく私を感じます。……………少しの善をも見出して救いきろうと思召す如来の大慈悲を事実の上にはつきりと拝し、お念仏申さして頂きました。△△様ではございません。絹があのとおりでございます。赦して下さいませとも申されません。お願いでございます。お足もつれにもなりましようが、どうぞお浄土までお連れ下さいませ。今この手紙を認めつつも泣けて泣けて仕様がございません。

岡山の義彦さんから先日お便がありました、二十日ごろ本部へ帰らしてくれとの事で、いろいろと御法のことを書いてございました。あの弟もとうとう如来なくしては、そしてあなたなしには生きられない子にして頂きました。私はあなたへのお礼の言葉もございません。ただお念仏申すことによつてそれに代えさせて頂きます。5 私は早速、父上も母上も祖母も義彦さんも律ちゃんも、皆で揃つて本部の御本尊様のみ前でご説法に会える嬉しさを書いて返事致しました。骨肉を超えての親子兄弟にさして頂いたのもみな、あなたのおかげでございます……………このごろは日日起る事すべてが、尊い尊いみ教えならぬものはございません。ありがとうございます。四方八方からみ教えめにして頂きます。ひたぶるご帰宅をお待ち申し上げます。先日お足のシモヤケの薬を買つて帰ろうと存じていましたら……………以下略……………絹家」

春季聖講が近づく、ひたすらに念仏して、心を一にして、同胞の帰りを待つべし。本部の念仏はそのまま地方に反映して同胞の上に光る。念仏の上に本部のみなみなを憶う。

「合掌 南無阿弥陀仏、此の度は如来の御冥見に叶はず御大病遊ばされ候処、平素の毒舌に免じて、一時娑婆どめと相成候こと先以つて大慶の至に奉存候。然る所来る二十六日よりの井野支部五周年記念の聖会に万一御欠席のこともあらば、いよいよ閻魔法王庁へ御出立も間近しと覚えられ候事故、十分御養生専一に存上候。命のうちはいよいよ念仏一道に精進し、三世諸仏出世の儀にも則り自信教人信の報恩行に生かされ候こと仏徒本懐の至りに存候云々。」

これは、一月ごろ、肺炎を患われた岡本老師への全快祝いの要旨であった。老師、この恨み七生の間忘れぬとて、喜ばれること喜ばれること。例の小型日誌の間から出しては喜び喜び、その眼には露が光っている。

杵束、安城、井野などよりの来会あり、午前は座談。み法の華はいよいよこの地に咲いて、念仏に埋もれ、静かに終りをつげた。

二十三日浜田支部、顕正寺に移る。寺につけば、大野のお母さん、林さんなどが迎えて下さる、落合さんがご病気で見えないのが淋しい。現益讃を語る。いつもながら、おっとりした会、とまりがけの人たちもあつて盛会であつた。幡谷先生は、近ごろ本山の命により、福岡市への開教のため、毎月出張、現にこの度、帰られたばかりのところであつた。

二十六日、幡谷さん、林さん、青山さん母子、光善寺の奥さん等と折居からタクシーで井野村明覚寺に至る。顕正寺の奥さんが浜田駅で時間切迫で乗車できず残念であつた。

この度は、井野支部五周年記念講習会である。用意万端完了。続々と集う同志。憶え。井野支部五年間の歩みを。支部長、武井諦了、岡本法幢二氏の求道念仏精進は、そのままこの村を中心に反映して、この日を生んだのである。

雨にも風にも正しいものをにらんでの一貫の歩み、そのみがやがて健全な世界を生む。法田は人間の欲心や、政策や、名利心では開拓されるものではない。真摯なる求道者の足跡、一貫相続の行者を中心にのみ正覚の浄華は開く。寺院住職の第一資6格を問うならば、その合掌求道の真剣なる歩みにある。しこうしてわが石州は実に、この人を多く有すること、他に比例がない。本村のごときは武井、岡本の老師を有するのである。

二十六日午前九時、いよいよ五周年式典は始まる。荘重なる勤行について、白衣に五條を着したる神々しき様なる岡本老師は、本尊の前に参進して三礼し、焼香して高座に昇り、恭しく奉白の文を朗読せられる。世尊の御出世より大経の会座に至り、その教説を宣べ、七祖をたたえ、やがて聖人の恩徳を宣べ、光明団井野支部誕生の経緯に至り、如来真実の教に値いたるを讃嘆せられる。言々鬼神を泣かしむるものあり、長文の奉白文をおわれ、やがて型のごとく式典もすみ、いよいよ午前の講義に移る。講題、論注の「他利利他の深義」である。

かくて三日間、本団聖講に則り講義、講演、各班座談、合同座談等に終始する。まことにしつくりとした聖会であつた。私は曇鸞大師の深い世界をのぞき得て、聖人の絶対他力の宗教の源底にふれたことを衷心から喜ぶ。二十八日夕方、茶話会があり感想発表があつたが、われらは幾度か涙にさそわれた。私はここでも、新たな人の世の苦悩と如来の救済を事実の上に拝み、世間の雑音を超えて浄土の声に生きる幾人かの人を新らしく拝んだ。「本願力にあひぬれば、むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし。」誠なるかな。

かくて島根のみ法の旅は終った。静かなるべきみ法の旅も、しかしながら波風は荒い。誤解があり、迫害があり、攻撃があり、邪魔があることは、世の中に生きる以上、悪事を働く人にさえあることである。われらは小さな歩みの上にもかなり痛烈にあることながら、これは光明団の上に限ったことではない。

悲しむにも足らず、誇るにもあたらず、ただただ、本仏のみ心に叶うよう、本師知識のみ教えに相応するよう、肅々として歩めばよいことである。いたずらにわが正しさを主張して、世間の声を排するはまた一つの我といふべきである。私は、若の寺で大衆にお願いした。

「本村でもかなり非難や攻撃があるそうですが、よいことでもあります。院主はまだ二十三歳でありますから、今から平和や、大成はいけません。どうか立派な一人の仏弟子にしようと思つて下さるなら、もつともつとしつかりお願い致します。本堂の一度や二度は焼かれるくらいな目に会えば、少しは御法のお役に立つ人間になりましょう。讚美や、温かさは禁物であります。若はしかし、その峠のあの松の大木が三本あつたが、あれを見るがいい。僅かな風にも笹の葉は動くが、あの松の大本を吹いたところで動きはしない。あの松を学ぶがいい。風が吹くのは世間の常である。」沈黙して一切から学ぼう。行くべき道も、歩み方もわかっている。

廿九日朝、井野村を発つて、折居駅に出た。ここで、浜田菊太郎氏とその母堂、佐々木きしさん、染香寺の奥さんなどと一緒になり、各駅で人を加えつつ、二十幾人の団体となり、小郡經由午後六時二十五分己斐駅に着いた。だれよりも先に岡山の父の顔が見える。迎えられて本部に入る。み親よ。ただ今無事で帰りました。皆様ただ今、勤行の間のありがたさ。やがてわが書齋のなつかしき。いよいよ明朝より春季聖講。同胞たちが夜遅くまで帰つて来る。